

寒さも緩み、春の訪れを感じる今日この頃となりました。令和3年度も新型コロナウイルスの感染情報や感染対策に右往左往し、子どもも大人も多くのストレスを感じた日々だったかもしれません。子ども支援室では1月末までの相談件数は約2650件、実人数で384名の方が利用されました。子育てや発達についての相談、登園・登校渋りに関する相談が多くありました。保護者の方や子どもたちの困り感に寄り添い、必要に応じて関連機関とも連携しながら少しでも子どもたちが自分にあった環境で健やかに成長していくためのお手伝いができればと考えています。

今年度もオンラインで研修会を開催し、多くの先生方や保護者の方々に視聴していただきました。よりよい子どもたちの成長のために生かしていただけたとうれしいです。

感想や内容の一部を紹介します！

☆7/9「子どもの行動理解と支援～作業療法

・感覚統合の視点から～」【教職員対象】

藍野大学准教授 作業療法士 高畑脩平先生

〈参加者の感想より〉

- 五感の他に固有感覚、前庭感覚と知らない感覚があることも学び、幼児の感覚を理解しようとする意識を持つことが大事だと感じました。高畑先生の本も読んでみたいと思いました。(幼)
- 多様な子どもがいる中、作業療法士の役割も重要と感じました。ネットでも見られる「子どもの育ちを応援する作業療養士の視点」の資料も活用させていただきたいと思います。(幼)
- 指示をなぜ聞けないのか、なぜ集団で活動できないのか、理由を理解した上で支援をしていくことが大切だと改めて思いました。「字を書くこと」に関して字を書きやすくする、覚えやすくする具体例がとても参考になりました(小)

☆11/25「不安の強い子どもへの

理解と対応について」【教職員対象】

川村学園女子大学准教授 早稲田大学応用脳科学研究所招聘研究員 今井正司先生

〈参加者の感想より〉

- 子どもたちの不安は、大人が作り出していることが多いとの話がありました。日頃から、失敗はするもので、チャレンジする気持ちが大切であることを頭に置きながら援助していますが、言葉のかけ方が適切であったかを考え直す機会となりました。(幼)
- 子どものドキドキをあたたく見守りながら支援していくことの大切さを知りました。(小)
- 学校では、成功体験を経験させるよう努力してきましたが、難しい面もあり、失敗したときのリカバリーの方法を見つける(教える)ことや、失敗してもいいよという環境をつくるのが大切だと分かりました。(中)

☆10/12～11・25「子どもの心に届くほめ方・励まし方・叱り方」【保護者対象】

川村学園女子大学准教授 早稲田大学応用脳科学研究所招聘研究員 今井正司先生

○怒る、叱るから『伝える』の視点が大切！

- 「叱る」から「話し合う」に変えるコツ(他のエピソードと連結しない。長々と叱らない。謝ったら引きずらない。交換条件を出して叱らない。)子どもをコントロールしようとするのではなく、良いところをほめるというやり方に変えてみる。

○ほめ方のNGもある。「すごいね!」「才能あるね!」は時にはいいが、その時はプロセスをほめることを加えるといい。(詳しくは「ぬっく」HPの『褒め方・叱り方』も見てみてください!)

今年度も為になるお話をたくさん聞かせていただきました。

令和4年度もまた今井先生のお話をお聞きすることができる予定です!お楽しみに!!

